

死をどうしたら受けとめられるのか①

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

突然の死に

2011年3月11日、東日本大震災。あれから1年が経ちます。テレビで映し出した大津波の威力。そして、思いもかけない原子力発電所の被災と事故。忘れようにも忘れられない映像です。かつて、阪神・淡路大震災では地震によって曲がりくねって倒れた高速道路が映し出され、こんなことが起きるのかという思いになりましたが、今回の、特に大津波はまるでSF映画のようで、現実とは信じられない衝撃でした。そして、災害は突然、人々の生活を破綻させ、死をもたらしました。そのような死に対し、私たちは「どうして?」「なぜ?」という思いに取り憑かれます。「なぜ、あんなに多くの人が犠牲にならなければならなかったのか」

作家の曾野綾子さんは、近年、高齢者や死についていくつもの発言をしています、『揺れる大地に立って 東日本大震災の個人的記録』(扶桑社、2011年)を昨年9月に上梓しました。その中で、曾野さんは、日頃から地震の対策もしてきた現地の人が今回の津波は「想定外」だったと口々に話していることから、「運」以外の答えを導きだせないときがあることを記しています。野蒜駅で2台の列車が反対方向に発車、「下りは丘の上で停車し、乗客のアドバイスで無事。上りは津波に襲われ、乗客数人が命を落とした」ことについて、「それが、再び運というものの存在を思わせる。運の観念なしに今回の地震を見ることができないのである」(p.217)と述べ、次のように続けます。

それは最も厳かで根源的な、そして誰にも操作できない力である。つまりどうしてあの人には死に、自分は生きていられたかということになると、「運」以外の答えを見つけることは困難だ。

旧約時代の人々は、老、病、死、をその人の行いの結果だと考えた。つまり人間が何か悪いことをすれば、老、病、死という暗い結末をもって報いられると考える他はなかったのである。

しかしこの世を正しく生きた人も、しばしば不当な目に遭う。ことに今回のような、同じ小学校の同じクラスに通う子供が、一人は死に、一人は生きたという、この不平等に対しては、如何なる知恵者をもってしても十分な答えを出すことはできないだろう。まだ学齢にも達しないような幼い子供が、人間の罪の罰として、死を受けなければならぬ理由などどこにもないからである。

それ故に、イエス以後の新約の思想は、この世を勧善懲悪の結果とは考えなくなった。本当の報いは死後にあると考えたのである。(pp.217～218)

私たちが人生設計をするとして、そこに大災害を組み込む人はほとんどいないでしょう。大災害は私たちの人生にとって、いつも「想定外」の出来事で、そのようなことを常に考えてはいないと思います。人生にはどのようなことも起こりうるわけですが、曾野さんは「人間はあらゆる運命に遭遇する」(p.89)ものであると認識し、そういう人間だからこそ、運命から学ぶことができるということも示そうとします。キリスト者で知られる曾野さんですが、彼女は本書の第1章で「すべて存在する

ものは善きものである」というアウグスティヌスのことばを用い、「この一言で私は世の隅々にまで光が差し込むのを感じた。もちろん照らし出されれば、そこには個人の^{かきん}瑕瑾も醜悪さも後悔も浮き彫りになって来る。しかしそれでこそ、人間がそのような運命に出会った意味というものも発見されるのだ。私はこの災害を、恐らくそのような目で見ようとしていたのだと思う」(p.24)と述べています。

死への意識

日本は歴史的にも類を見ない「高齢社会」に突入しています。2012年1月30日に発表された「日本の将来推計人口」(国立社会保障・人口問題研究所)によれば、1. 今後わが国では人口減少が進み、平成27年(2015)の推計人口は8,674万人、2. 人口高齢化が進行し、平成27年(2015)の65歳以上人口割合は39.9%、3. 長期仮定、合計特殊出生率は1.35、平均寿命は男性84.19年、女性90.93年と、ますます高齢化が進んでいくことが予測されています。1945年、第二次世界大戦が終わったときには、想像すらできなかったことでしょう。

この寿命が長くなったことは、日本人の死に対する観念を変えていったと思われまふ。人生80年・90年と人生50年との違いは、死を人生の終末、つまり、誕生→子供→青年→成人→壮年→老年→死という人生のプロセスが当然と受けとめるようになったという点にあるといえるかもしれません。だから、突然の死は「早すぎる」のです。生涯の途中だということに「なぜ?」と問い、答えを見出そうとします。言い換えるなら、「いつ訪れるのか」分からなかった死という意識は、「人生を全うした」あとに死があるのだと意識されるように変わったため、事故や事件、災害など、人生の途上での突然の死は、よりいっそうに理不尽に感じられてしまうと思うのです。

ところで、突然の死に限らず、死をどのように受けとめるか、受け入れるか、納得するのかというとき、それが誰の死であるかによって、私たちは異なった反応をします。フランスの哲学者ジャンケレヴィッチ(Vladimir Jankélévitch)は、死を「一人称の死(自分の死)」、「二人称の死(家族など身近な者の死)」、「三人称の死(他人の死)」に分けました。(三人称の死には、他人ではあっても知っている人とまったく知らない人があるので、これをさらに分けることも考えられる。)死の対象を分けて考えてみると、死の様相は異なって見えてきます。ただ、いずれにせよ、「私が」死をどう考えて、どう受けとめるかということになります。これは、いわば「死生観」「人生観」の形成という作業になると思うのですが、死に対して如何に向き合うかということでもあります。そうして、このことは自らの生き方に反映し、また「二人称の死」や「三人称の死」で苦しみ嘆き整理のつかない人に向かうときの基盤ともなっていくのだと思います。さらに、近年の「一人称の死」に対する関心は、人生の最期として死を考えることから、死の準備教育やターミナル・ケア(終末期医療)に向かい、「二人称の死」への対応として、グリーフ・ケアが考えられるようになってきました。